



TITLE:

<研究ノート>『文学評論』の構造 と射程:キルケゴールにおける「弁 証法的なもの」

AUTHOR(S):

谷塚, 巖

CITATION:

谷塚, 巖. <研究ノート>『文学評論』の構造と射程:キルケゴールにお
ける「弁証法的なもの」. 近代/ポスト近代とキリスト教 2012, 2011:
79-92

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/155075>

RIGHT:

研究ノート

『文学評論』の構造と射程

キルケゴールにおける「弁証法的なもの」

谷塚巖

はじめに

キルケゴールの「著作」を扱う際には、次のような言明からも明らかなように、特に仮名性という点に注意しなければならない。

...誰でも、もし諸々の著作の中から特定の文言を引用したいというようなことがあるならば、その人は私の名前ではなく、それぞれの仮名著者の名前を引き合いに出すように配慮して欲しいし、またそのことを切に願う.....¹。(KW, XII, 627)

キルケゴールはこの後に、それらの仮名著作で言われていることの「責任は、市民的には私に属する」(ibid.)としてその法的責任の所在を明らかにし、またこれらの「著作」がキルケゴール自身の創作であることを認めてはいる。しかし、仮名著作で言われていることを、そのままキルケゴール自身の思想であるかのように見なすには問題になることが、ここで示唆されているのである。このことは、キルケゴールの思想を解釈する場合に、困難な問題を突きつける。ただこの言明からは、少なくともキルケゴールがさまざまな意図を仮名に託しつつ著作活動を行なったということ、したがってそのような意図をまず踏まえることが、キルケゴール解釈にとっては重要になるということは確認できると思う²。

とはいえ、仮名にそれぞれ隠されているキルケゴールの意図を明らかにして、それを踏まえつつキルケゴールの思想を解釈することは容易ではない。そのためには準備的な作業が必要になると思われる。キルケゴールには実名で出版し、したがって実名で扱われることを本来の目的とした著作がある。そこで、仮名著作の検討に入るのに先立って、そのような実名による著作から、キルケゴールの思想にアプローチするための手掛かりを見出すことが適切ではないかと思われる。

本研究ノートではこの作業を進めるために、『文学評論』を検討する。キルケゴールが実名で署名しているほとんどの著作は、いわゆる宗教的著作と呼ばれる一連の著作であるが、その他にも『文学評論』、『ある女優の生涯における危機とある危機』、生前その一

部分が出版された『アドラーについての書』などが挙げられる。『文学評論』を取り上げるのは以上のような仮名性の問題に加えて、著作の分析を通してキルケゴールにおける基本的な思考方法、更には、「仮名」で意図されていた「間接的伝達」の問題について理解を深めることができると考えるからである。

なお、「弁証法」という用語についてであるが、本研究ノートではさしあたり、ソクラテス的な真理認識のための手続きとしての「対話」の意味合いで捉えた、暫定的な用い方を³。キルケゴールの思考方法にも、そのような「弁証法的」な特徴が見られるのであるが、重要と思われるのは、それがキルケゴール自身の思惟の中で完結せずに、それを超えて現実の中で何らかの生成が生じ得るような、実存の生成をも射程に入点である。本研究ノートではそういった解明のためのポイントを確認し、今後の展望につなげたいと思う。

以下、1で『文学評論』について概観し、2で『文学評論』において見られる「弁証法的なもの」について検討し、3で本研究ノートで解明できた点、および今後の展望について述べることにする。

1. 『文学評論』について

1 - 1. 執筆の背景

『文学評論』は、もともと Nordisk Literaturtidende (「北欧文学時報」) という文学雑誌に書評として寄稿する計画の下に執筆されたが、分量が大幅に増え、一冊の本として出版されることになった。(KW, XIV, 5) したがって一冊の著作物ではあるが、形式上は書評になっている。

キルケゴールは本書を 1846 年 3 月 30 日に、実名で出版している。実名で出版されたということからも分かるように、本書に対しては他の仮名著作とは異なった位置づけが与えられていた。当時、キルケゴールはヨハンネス・クリマクスという仮名で、『哲学的断片への結末としての非学問的あとがき』を執筆していたが(1845 年 12 月に脱稿)、この仮名著作以後の、「著作家」としての自身の役割を考え直していた。(KW, XIV, ix-x)⁴ 『文学評論』の執筆はそのような転回点の時期に行なわれている。キルケゴールの日誌からは、「著作家」として思想を発表するのではなく、これからは「評論家」として、つまり書評という文体で、自身が著書から学び発展させた思想を発表しようとしていたことが窺われる。(KW, XIV, 119)

1 - 2. 『文学評論』の構成

『文学評論』でキルケゴールが取り上げる著書は、当時のデンマークにおいて匿名で作家活動をしていたトマシーネ・ギュレンボー(1773-1860) という女性作家による小説『二つ

の時代』である。ギュレンボーは、『ポロニウス一家』や『日常生活の物語』などの小説を発表し、匿名作家としてではあったが、当時のデンマークでは『日常生活の物語』の作家と呼ばれて有名になっていた(ibid, vii)。キルケゴールもこれらの小説を読んでおり、『日常生活の物語』にいたっては、初めて執筆し発表した『いまなお生ける者の手記より』(1838)の中で取り上げている程であり、この小説の作者を好意的に評価している。(ibid, viii)

『文学評論』の目次は以下のようになっている。

序文

第一章 「両部の内容概観」

第二章 「小説の美的解釈とその詳細」

第三章 「二つの時代の考察の結論」

「結論：革命時代」

「結論：現代」

第一章では『二つの時代』が第一部「革命時代」と第二部「現代」とに分かれ、それぞれにおいて時代の「家庭生活への反映」が人物描写を通して描かれていることが概観され、第二章では、その内容についての解釈が行われる。そして第三章でキルケゴールの結論が述べられるが、この第三章については前の二つの章と比べて分量も多く、また書評という枠組みでは捉え切れない独特の意義を有している。

1 - 3 . 第三章について

目次でも確認できるように、ここで注意が必要と思われるのは、この第三章の扱いについてである。第三章は現在では『現代の批判』として独立して知られている論考でもあるが、もともとは『文学評論』という、それ自体が書評であり、しかもその書評の結論部分にあたる箇所となる。したがってそれが、はじめから一冊の著作として意図されたわけではなく、あくまでも小説の論評として執筆されたと言う点は注意しなければならないと思われる。

しかし、第三章のみが分離されて扱われてきたのにも理由がないわけではない。なぜなら『文学評論』を書評として見た場合に、第三章の部分で論じられる内容は、書評の枠組みからはみ出す思索の展開が認められるからである。

ではなぜこのようなことが行なわれたのだろうか。それを示す手掛かりは第二章で述べられている。それは次のように説明されている。つまり、作家が小説の序文で示唆しているにも関わらず、その作品の中で果たせなかった「両時代の比較」という「第三の課題」を(KW, XIV, 47)、キルケゴールみずから引き受けて遂行したということである。キルケゴールは小説の書評ということでみずから果たさなければならない役割を、作家が示唆するに留まっていた「両時代の比較」までに拡大し、そこから更に思索を展開するわけであ

る。そしてその結果が第三章において「結論：革命時代」と「結論：現代」というタイトルが付けられた論考で示され、更にはそこから、「小説...とは無関係に」(KW, XIV, 76)とキルケゴール自身が述べているように、小説ではなされていない思索が独自に展開されていくのである。キルケゴール自身も「読者はもしかすると、...小説にはないものを私が作り上げていると思われるかもしれない。」(KW, XIV, 58)と述べて、少なくとも小説では明示的になっていない内容が展開されることを示唆している。

また、この書評が書かれた要因も重要であると思われる。キルケゴールの作家に対する賞賛の念(KW, XIV, 23)はともかく、一方で、みづからが抱えていた「コルサー問題」も指摘される。(KW, XIV, x) もちろん、キルケゴール自身が「自己自身の現実性」を作品の中に持ち込むことを否定しており(KW, XIV, 98)、本文中にはその問題は直接的には言及されないが、この現実問題との結びつきも、第三章について考察する場合に重要であろう。

すなわち『文学評論』の第三章は、キルケゴールが小説から学んだ時代の「契機」と、キルケゴール個人の「現実性」とが結びついた論考としても理解できるのである。小説で提供されている「批評」(KW, XIV, 60)の単なる焼き直しを超えた、独自の文化評論としての意義が、このような結びつきで構成されているとすることができる。

以上から、書評の枠組みを踏み越えた文化評論がなぜ可能であったのかに関して、次のように言うことができる。つまりキルケゴールにおいて小説(テキスト)との弁証法的(dialectic)な関係が生じていたということである。キルケゴールは『二つの時代』というテキストから、そこで示唆された作者の批評をただ繰り返そうとするだけではない。(KW, XIV, 69) 小説から示唆を受けた内容を、キルケゴールの現実性において受け取り、そこから思索を行なう。そしてそのことを実践しながら、第三章の論考である文化評論を生みだしていると言うことができるのである。

1 - 4 . 時間構造

更に、第三章でそれぞれの時代について論じられる分量に関しても、内容的に「現代」の方に圧倒的な比重がおかれていることは注目に値する。すでに過去となっている「革命時代」よりも、むしろ「現代」により重点が置かれているのである。このような過去から現在、更には未来へという時間論的な問題意識は、たとえばコンスタンティン・コンスタンティウスという仮名著者の『反復』におけるモチーフとも重なるものである。すなわち、たとえば「革命時代」の特徴としてキルケゴールが取り出す「内面性」を、現在において内在的に、つまりただ思惟の中だけで「反復」するのではなく、それを現実の生における現在から未来という方向性でいかに「想起」するか、という実践的な問題意識が背景にあると思われる⁵。

このような時間論的な問題意識はキルケゴールの思索において特徴的であり、それは『文学評論』の第三章にも通底するものと思われるが⁶、ただし、この点については、別の問題設定において更に検討していく必要があると思われるので、本研究ノートでは、『文学評

論』の第三章が内容的に「革命時代」よりも「現代」の方に　ここでは、未来の可能性についても論述される　より比重を置いている点を指摘するにとどめることにする。

２．『文学評論』における両義性

２－１．「革命時代」

さて、以上を踏まえた上で、次にそれぞれの時代について論述されている具体的内容を見ていくことにする。

キルケゴールはこの部分から、小説で課題として示唆されたまま残されていた「第三の課題」(KW, XIV, 47) である「両時代の比較」を行なう⁷。そのためにまず、「革命時代の概念が反映する諸々の結果を、より一般的な仕方で示唆する」ことがここでの課題として設定される。(KW, XIV, 61) 「革命時代の概念」は、「革命時代は本質的に情熱的である」と言い表される。キルケゴールは「概念が反映する諸々の結果」を次の七点にまとめている。

本質的に形式がある。(KW, XIV, 61) 文化(教養)がある。(ibid.) 理念以外のあらゆることに対して暴力的・暴動的・野蛮・冷酷になることができない (ibid, 62)

礼節の概念がある。(KW, XIV, 64) 直接性がある。ただし、その直接性は最初の直接性ではなく、また最も高次の意味での最後の直接性でもない。それは抵抗の直接性であり、その限りで暫定的である。(KW, XIV, 65) 本質的に顕示である。(KW, XIV, 66) 矛盾律を止揚せず、善か悪かのどちらかになることができる。(ibid.)

キルケゴールは「革命時代」が本質的に「情熱的」であり、したがってそこには本質的に「形式」があるという仕方で、「文化」・「暴力」・「礼節」・「直接性」・「顕示」・「矛盾律」とそれぞれについて議論を進めていくが、ここでのポイントは、「革命時代」が「情熱的」であるということに伴う「内面性」である。そしてこれは内容の欠如した単なる「外面性」との対比で論じられる。たとえば、「形式」については、次のように手紙を例に挙げて論じている。すなわち、情熱を感じさせる表現には「内面性」が見出され、したがってそれ自体に見えるものがある。それに対して、手紙が形式通りに折られているかどうかということを問題にするのは、手紙の内容的意味を忘れて表面だけに拘泥することである、というように論じる。(KW, XIV, 61)

このように、ここで主要な論点として指摘できるのは、「革命時代」において人々は内面的に情熱に満ちており、そしてそのことが外面的にも確認できるような仕方で表れているという点である。なお、ここで注意すべきは、上の七点によって把握されている時代の特徴が一義的な評価の結果ではなく、したがって両義性⁸を有しているということである。「暴力」や「礼儀作法」のような正反対の意味を有するような議論も、一つの時代の特徴として論じられるのである。

2 - 2 . 「現代」

さて、キルケゴールは次に「革命時代」と「現代」との比較に移る。前節と同じく小説においては示唆に留まっていた「第三の課題」を遂行するために次のように課題が設定される。「ここでの課題も再び、小説のために批評的に仕えるということで私が理解しているように、著者が文学的に巧みに描写した諸々の契機を、より普遍的⁹な考察において前進させることにある。」(KW, XIV, 68)

「革命時代」との比較によって考察される「現代」は、二項対立的に「革命時代」と真逆で捉えられる。「現代は本質的に分別のある反省的な時代であり、情熱が欠け、外面的なものに燃えあがり、一時的にしか熱狂しない、無気力の中で注意深くくつろぐ時代である。」(ibid.) ここでキルケゴールが取り出す「現代」の特徴は、次のように要約することができる。すなわち「分別的・反省的な時代であり、情熱に欠け、したがって決断にも欠ける無行動の時代」である。

このように、キルケゴールは「革命時代」との対比を通して「現代」の特徴を浮き上がらせ、「第三の課題」を遂行していくのであるが、重要なのは、こうして思索の糸口が見出されたことであろう。小説の書評という枠組みを踏み越えた議論はここから始まるのである。キルケゴールに即せば、それは次のような内容的なまとまりでなされる。「弁証法的なカテゴリー規定とその帰結という観点からなされる現代の分析」(KW, XIV, 76)、「現代が反映するより具体的な属性」。(KW, XIV, 96)

なお、以下ではそれぞれの論考の詳細な検討は行わずに、現段階で確認できる重要と思われる論点に絞って考察することにする。

2 - 2 - 1 . 「弁証法的なカテゴリー規定とその帰結という観点からなされる現代の分析」 「水平化」と「単独者」の生成

キルケゴールが「現代」を分析する場合、それは必ずしも時代を評価するために行なわれるわけではない。このことはキルケゴール自身が次のように述べている通りである。

ところで、どの時代がより良く、より重要であるかということは小説そのものの中では触れられてはならず……、また、小説を模倣し、小説の下位につき、小説に仕えるこの書評でもそれは触れられない。問題は時代が いかに あるかのみであり、このいかに はより普遍的な見地から達せられる…。(KW, XIV, 76)

ここでは、あくまでも書評の延長線上で思索が行なわれるわけであるが、このような新たな論考においても、時代の評価を目的とする分析が行なわれない。時代が いかに あるかということは、必ずしも「否定的・消極的」にのみ把握されることを意味せず、ある段階においては「肯定的・積極的」にも把握される。キルケゴールは「現代」を分析して、「反省」や「水平化」、「公衆」という特徴を挙げるが、これらはあくまでも両義的に捉えら

れるのである。この点はキルケゴールの思考方法においては特徴的であり、これはキルケゴールの思索のさまざまな局面で確認することができる。以下で、そのような両義性を併せ持つキルケゴールの思考方法を、キルケゴールの思索の展開に沿って見ていくことにする。

キルケゴールが「現代」の特徴を分析していく際、上の引用でも示唆されているように、人々が いかに 関係しているかというその関係のあり方に注目する。人々がどのように存在し、そしてどのような仕方で相互に関係しているかということは、過去との対比で明らかにされる。ここで重要なポイントとなるのは、『文学評論』の第一章・第二章において小説『二つの時代』を解釈する中で取り出されてきた「内面性」と「外面性」である。

.....反省的であり、かつ情熱が欠如している時代は、力として表現されるものを、弁証法的な巧みなわざに変える。すなわち、それはあらゆる物事を存続させはするが、巧妙にそれらから意味を奪い去っていくのである。反乱において最高潮に達する代わりに、反省の緊張...において、関係の内面的現実性は消尽されるのである。(KW, XIV, 77)

人々があらゆる物事に対して「反省」的になるにしたがって、相互の内面的で現実的な関係は稀薄化していく。それは、「反省」によって人間相互の関係が緊張関係、つまり「注意深く互いを監視し合う」(KW, XIV, 78) 関係に変わる中で生じる。キルケゴールは「反省」がもたらす帰結として、このような個々人の間の内面的な関係の疎外化を見る。またそれと同時に、そこでは無意味性も生じてくることが見られる。「内面性」が失われていく過程は、同時に意味の喪失の過程でもあり、「弁証法的」にはその埋め合わせのための「外面性」が次の論点となってくる。

「外面性」が考察されるのは、人間相互の関係が、「内面性」が失われているにも関わらず、それでも存続しているという側面においてである。「...情熱的な時代においては熱狂が統一原理であるように、情熱のないきわめて反省的な時代においては、羨望¹⁰が消極的な統一原理となる。」(KW, XIV, 81) つまり、人々の相互の関係を表面的（外面的）に結び付けている消極的な行動原理を「羨望（ねたみ）」とするのである。

「反省」がもたらす「弁証法的」な帰結は、それが「反省 羨望（ねたみ）」となって人々の消極的な行動原理となるとき、「内面性」においては「決断」の欠如となり、したがって、個々人における積極的な行動の欠如、すなわち、それが「外面性」においては「水平化」となる。

個人における反省の羨望は、情熱に満ちた決断を阻止する。そしてもし彼が決断の境界にいたとしても、周囲からの反省的な反対が、彼を止める。反省の羨望が、意志と力とをある種の捕囚として捕えるのである。(KW, XIV, 81)

羨望はそれ自身を確立する過程で、水平化の形式をとる。情熱的な時代は加速・上昇してひっくり返し、また持ち上げて下げる。他方で、反省的で無関心な時代はそれと逆のことを行なう。つまりそれは窒息させて妨げる。それは水平化するのである。(KW, XIV, 84)

こうして、「反省」から「水平化」へと思索が展開されるわけであるが、ここで注目すべきは、この「水平化」の現象がまだ中途にある段階として把握されている点である。この「水平化」は更に徹底化されなければならないと考えられるのである。そして、これを推し進める原動力として「公衆」・「新聞」が取り上げられる。

水平化が真に成立するためには、幻影が最初に出現しなければならない。それは水平化の精神であり、恐ろしいまでの抽象であり、一切を包括する無である何かであり、蜃気楼である。そしてこの幻影が公衆である。情熱のない反省的な時代においてのみ、この幻影は、みずからも幻影となった新聞に助けられて発展することができる。(KW, XIV, 90)

キルケゴールのここでの思索の展開は、「具体化」とは反対の「抽象化」の方向をたどっていく。しかし、キルケゴールはこのような極端な「抽象化」を「否定的・消極的」にのみ捉えるわけではない。むしろこのような「抽象化」の中で個人は「完全に教化」され、そしてこのような状況においてこそ、「誰もが宗教的に自己自身を得ることができる¹¹」として(KW, XIV, 92)、「肯定的・積極的」にも捉えていくのである。

このような事態は次のように言い換えることができる。すなわち、「水平化」が進行せざるを得なくなっている時代においては、人々の内面的な関係は喪失し、したがって個々人の実存は限りなく単独化されつつある（否定的・消極的側面）。しかし、そのようにして「単独者」となった状態においてこそ、「宗教性」への目覚めという可能性も開かれてくるということである¹²（肯定的・積極的側面）。

キルケゴールはこのようにして、「水平化」という「現代」における「抽象化」のプロセスを両義的に思索していく。すなわち、一方では「単独者」の生成という否定的・消極的プロセスとして、他方では、「単独者」における「宗教性」の獲得という肯定的・積極的プロセスとして捉えていくのである。

2 - 2 - 2 . 「現代が反映するより具体的な属性」 「宗教的実存」と「間接的伝達」

これまでの議論は、キルケゴールによれば、事実そうになっているかどうかということには関わりなく進められてきた。(KW, XIV, 96) キルケゴールは、ここから現実における諸々の具体的反映についての考察に移り、さまざまな属性 「饒舌」・「無形式性」・「表

面性」・「浮気」・「屁理屈」・「無名性」を挙げて説明していくが、ただ、この箇所での議論で特に重要と思われるのは、キルケゴールが「現代的意味における預言者」(KW, XIV, 105) として、来るべき未来について論及している点である。キルケゴールが自覚的にこのことを述べようとしていることは、次の引用からも確認することができる。

あまりにも僅かなことしかされない我々の時代においては、あまりにも多くの預言、黙示、暗示、未来への洞察がある故に、おそらく、それと共に歩むより他になす術はないだろう。もっとも私には、預言や占いに重い責任がかかっている人とは反対に、私の言うことを信じようと思う人など誰もいないと確信できる気ままな都合のよさはあるのだが。(KW, XIV, 105)

キルケゴールが、単に現実だけを問題にしようするのでないことは上の引用でも示唆されている。つまり現実における実存が問題にされる場合、そこでの考察の方向性は現在から未来に向かい、未だ経験されていないこの先の実存の可能性を問う方向に考察が向かうのである。このことは、他方で、キルケゴールの時間論的な問題意識である「反復」とも密接に関連しているものと思われる。むしろ、このような問題意識があるからこそ、キルケゴールはこの先の実存の可能性、すなわち「宗教的に自己自身を得る」(KW, XIV, 106) 可能性について問えるのだとも言うことができるのではないだろうか。

キルケゴールはこのような問題意識を背景にして、それでは「宗教的に自己自身を得る」(ibid.) ことこれはキルケゴールの段階論との関連では「宗教的実存」と呼びかえることができると思われるは、いかにして可能になるのかについて考察するわけであるが、ここから、いわゆる「伝達の問題」が浮上してくる。つまり「間接的伝達」の問題である。ここでは「水平化」という現実が踏まえられた上で、そのような中で、個々の「単独者¹³」においていかにして「宗教的実存」への可能性を呼び覚ますかが課題になる。

キルケゴールは、この課題が達成されるためには、古代のような、階層性における「指導者」による直接的な方法ではなく、「水平化」の「現代」においては、主体的に「個々の単独者が各々みずからを助ける」(KW, XIV, 108) ことができるように、間接的な方法が考えられなければならないと論じる。(ibid, 109) 次の引用でも示唆されているように、キルケゴールがなぜ仮名によって著作を行なったのかということの理由も、ここから理解することができる。

識別できない者たちの中では誰も、敢えて直接的に助けたり、率直に語ったり、公然と教えたり、決然と群衆の指導を引き受けたりする者はいないであろう。(KW, XIV, 108)

識別できない者たちの中で最も信頼されている者ですら、敢えて彼らを助けたりしな

いであろうし、また彼らを助けることもできないであろう...、彼らは彼ら自身で跳躍しなければならないのである。(ibid, 108)

このように、キルケゴールは「水平化」の「現代」において、いかにして「宗教的実存」が可能になるのかという問いを立て、それを「間接的伝達」という方法、つまり「単独者」が、キルケゴールと同じように、主体的にその可能性を自覚できるような仕方で示そうとするのである。ここで特に重要と思われるのは、このようにして読者との間の弁証法的な関係の成立が試みられている点である。キルケゴールは仮名著作によって、テキストと読者との間に「弁証法的」関係を成立させ、更にそれによって、読者の側で主体的にみずからの実存の可能性を問えるような方法を考えていたと言えるのではないだろうか。

キルケゴールの思索においては、このように、一方ではテキストと読者との間の関係にも注意を向けるものであることが分かる。そこでは読者みずからがテキストから学び、それを自己の実存に反映させることが望まれているのである。

3．まとめと展望

以上より、本研究ノートで明らかになった点は次のように要約することができる。

1．まず『文学評論』における第三章についてであるが、この章でキルケゴールは、書評という枠組みを踏み越えて新たな思索を展開している。つまり小説において示唆されるに留まっていた「時代の比較」という課題を、作家に代わって引き受け、それを果たす中で明らかになった時代の特徴を土台にして、更に思索を発展させたのである。キルケゴールは作家の代理として、時代についての思索を継続させたと言える。

加えて、ここで興味深いのはキルケゴールの時間論的な問題意識との関連である。つまり『文学評論』全体にわたって、過去・現在そして未来までを射程に入れた時間構造が見出せるのである。小説では、『二つの時代』というタイトルからも明らかなように、内容は過去・現在に留まっている。キルケゴールは、『文学評論』においてこれを更に先に進め、未来の可能的な事柄にまで踏み込むのである。

2．次にキルケゴールにおいて見出せる、その「弁証法的」な思考方法である。キルケゴールは両時代の特徴づけを行なうとき、一義的には定義しない。たとえば、革命時代の特徴として、「文化（教養）」あるいは「礼儀作法」があると述べる一方で、「暴力的」でなければならないとも述べ、「革命時代」そのものを両義的に見ている。つまりキルケゴールの思考方法においては、物事を両義的に捉えていくという意味における「弁証法的」な特徴があるのである。

このことは「現代」をめぐる考察についても同様である。キルケゴールは「現代」を「水平化」の進行過程として捉え、そこに、「単独者」が生成されてくることを分析するが、このプロセスを必ずしも「否定的・消極的」に見なさない。一方では、そのような「単独

者」の誰もが「宗教的に自己自身になる」可能性へと開かれるプロセスとして、「肯定的・積極的」にも捉えるのである。ここにもキルケゴールの思索が、「弁証法的」に展開されていくのを見ることができる。

3．最後に「間接的伝達」の問題である。本研究ノートではこの問題が、キルケゴールにおけるどのような問題意識から発しているかは確認できたと思う。つまり「水平化」が進行し「単独者」が生成されてくる中で、いかにして「単独者」を「宗教的に自己自身になる」ことへと助力することができるかということである。キルケゴールはここで、それは直接的な方法、たとえば目に見えて明らかなような仕方ではもはや不可能であるとする。その上で、「間接的」に、「識別できない」仕方と言われるわけである。本研究ノートでは、キルケゴールの仮名が、このように、「単独者」が「宗教的に自己自身になる」ことができるように、「間接的」に助力するために考案されたある種の戦略であったということも確認できた。

さて、以上の三点を通して見えてきたのは、本文でも若干触れてきたが、キルケゴールにおける「弁証法的なもの」である。キルケゴールがそれを二重に用いていることは本研究ノートでも明らかにできたと思う。つまり、キルケゴールの思惟における論理展開の方法としてのものと、それを超えて人間の実存の生成に関わるものである。後者に関しては「実存弁証法」が考えられる。

この「実存弁証法」について考察するためには、キルケゴールにおける実存の段階論を踏まえないといけないであろう。つまり、「美的段階」・「倫理的段階」・「宗教的段階」の三段階説である。前段階から次の段階への移行は、前段階における「実存の崩壊」という否定的契機によって行われる。そして最終的に「宗教的段階」が来るのであるが、この段階は更に「宗教性A/B」の二つに分かれ、「宗教性B」の段階が真の実存、すなわちキリスト教の実存として論じられる¹⁴。

『文学評論』では、このような段階論に即した議論が行なわれるわけではないが、これまで見てきたように、「単独者」の「宗教的実存」をも視野にいたした上で思索が展開されていることは明らかであろう。キルケゴールは「水平化」の時代においては、みずからがみずからを助けなければならない状態にあると述べるが、このような「主体性」が問題になるような議論は、たとえば仮名ヨハネス・クリマクスの『哲学的断片への結末としての非学問的あとがき』で詳細になされる。段階論に即せば「倫理の実存」の生成をめぐる問題が考えられるであろう。また、「単独者」が「宗教的に自己自身になる」ために、「間接的」にいかにして助力できるのかという問題意識は、のちにアンティ・クリマクスという仮名で執筆されることになる『死に至る病』において思想的な成熟を見たと言うことができるかもしれない。副題「建徳と覚醒のためのキリスト教的心理学的論述」にも示されているように、ここでは段階論としては「宗教的実存」の生成をめぐる問題が考えられるのである。

<参考文献>

浅野仁、牧野正憲、平林孝裕（編）『デンマークの歴史・文化・社会』、創元社、2006年。

大谷長（監修）『キェルケゴールと悪』、東方出版、1982年。

大屋憲一、細谷昌志（編）『キェルケゴールを学ぶ人のために』、世界思想社、1996年。

小川圭治『キェルケゴール』（人類の知的遺産48）、講談社、1979年。

キェルケゴール『現代の批判 他一篇』、梶田啓三郎（訳）、岩波文庫、1981年。

キェルケゴール『死に至る病』、斉藤信治（訳）、岩波文庫、1939年、1957年。

R・トムティエ『キェルケゴールの宗教哲学』、北田勝巳・北田多美（訳）、法律文化社、1987年。

日本キェルケゴールセンター（刊行）、松本真一（編）『キェルケゴールとキリスト教神学の展望 ―人間が壊れる―時代の中で』、関西学院大学出版会、2006年。

ヘルマン・ディーム『キェルケゴールの実存弁証法』（1950）、佐々木一義・大谷長（訳）、創言社、1969年。

武藤一雄『キェルケゴール ―その思想と信仰』、国際日本研究所、1967年。

Søren Kierkegaard, “Concluding Unscientific Postscript to Philosophical Fragments”, Kierkegaard’s Writings, XII. Volume 1: Text, Volume 2: Historical Introduction, Supplements, Notes and Indexes, edited and translated with introduction and notes by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton University Press, 1992.

Søren Kierkegaard, “Fear and Trembling”, “Repetition”, Kierkegaard’s Writings, VI, edited and translated with introduction and notes by Howard V. Hong, and Edna H. Hong, Princeton University Press, 1983.

Søren Kierkegaard, “The Sickness Unto Death”, Kierkegaard’s Writings, XIX, edited and translated with introduction and notes by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton University Press, 1980

Søren Kierkegaard, “Two Ages”, Kierkegaard’s Writings, XIV, edited and translated with introduction and notes by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton University Press, 1978.

Søren Kierkegaard Gesammelte Werke, „Abschließende unwissenschaftliche Nachschrift zu den Philosophischen Brochen“, 16 Abteilung, 1, 2 Teil, übersetzt von Hans Martin Junghans, Eugen Diederichs Verlag, 1957.

Søren Kierkegaard Gesammelte Werke, „Eine literarische Anzeige“, 17 Abteilung, übersetzt von Emanuel Hirsch, Eugen Diederichs Verlag, 1954.

¹ Kierkegaard’s Writings, XII.1, “Concluding Unscientific Postscript to Philosophical Fragments”,

Volume 1: Text, Princeton University Press, 1992, translated by Howard V. Hong and Edna H. Hong, p. 627. キルケゴールからの引用は主に英語訳のプリンストン版から訳出し、引用箇所は本文末尾に（KW、巻数、頁数）で表記する。訳語についてはドイツ語訳ヒルシュ版、大谷長（監修）『原典訳記念版キルケゴール著作全集』も参照した。

² キルケゴールは、その前期の著作活動（『哲学的断片への結末としての非学問的あとがき』までの著作活動）において、一方では「美的著作家」として仮名を用いて著作を刊行し、他方では、それと並行して「宗教的著作家」として、実名による一連の『宗教的講話』も刊行している。キルケゴールにおいては、このようにそもそもの著作活動に二重性が見られるのであるが、なぜこのような仮名と実名という二重の仕方での著作活動を行なわざるを得なかったのかといった仮名をめぐる問題についても、考察すべき重要な問題である。小川圭治『キルケゴール』（人類の知的遺産48）、講談社、1979年、135-156頁参照。

³ 「弁証法」という基本的な考え方については、本研究ノートでは、「弁証法」の語源である「対話」という意味合い、つまり、二つの相異なる見解を起点に、両者のやり取りを通じて、新しい見解が獲得される生成的なプロセスとして、暫定的に捉えることにした。大屋（編）前掲書所収、藤野寛「逆説弁証法」、36-54頁を参照。

⁴ キルケゴールの伝記的事実については、本研究ノートで使用しているプリンストン版キルケゴール著作全集の英訳者による解説を参照した。KW, XIV, “Two Ages”, Historical Introduction, pp. ix-x. なお、解説についてもその参照箇所を、（KW、巻数、ローマ数字による頁数）で表記する。

⁵ 『反復』の第一部冒頭では次のように述べられている。「反復と想起は同じ運動である。ただ、反対の方向に向いているだけである。というのも想起されるものとは、すでにあったものであり、後ろ向きに反復されるものであるが、他方で、真の反復とは前向きに想起されるものであるからである。」Kierkegaard's Writings, VI, “Fear and Trembling”, “Repetition”, edited and translated with introduction and noted by Howard V. Hong, and Edna H. Hong, Princeton University Press, 1983, p. 131. 「反復」(Gjentagelsen)は語源的には「原状への復帰」を意味し、「受け取り直す」ということも意味する。キルケゴールにおいて「想起」と対比される「反復」は、超越的な宗教的概念であり、内在的な、理性的、哲学的概念ではない。すなわち、過去に向かう内在的「想起」や未来に向かう抽象的、非現実的な「希望」ではなく、「現在の、リアルな実存的現実」として述べられる。小川圭治『キルケゴール』、231-234頁参照。

⁶ このような時間構造の問題は、キルケゴールが課題とする新しい実存の可能性、つまり宗教的実存に至るための弁証法的発展とも関連することが考えられる。この問題は「実存弁証法」を解明するための重要な手掛かりになるものと思われる。

⁷ キルケゴールは第二章「小説の美的解釈とその詳細」で次のように述べている。「厄介なのは、作家が序文で、みずからに第三の課題を設定しているように思われることである。すなわち両時代の比較である。しかし、いかにすばらしく小説の二つの部分が比較のために整えられているとしても、作家はそのようなことをほのめかすべきではなかったと思う。」(KW, XIV, 47) ここからは、少なくともキルケゴールが、作家の動機が最終的には両時代の比較にあったと理解していることが分かる。第一の課題が「革命時代」が日常の生活や人間関係にいかん反映されているかについて描写すること、第二の課題が「現代」についての同様の描写にあったと考えられていたとすることができれば、第三の課題を、キルケゴールはまさに『文学評論』の第三章で、みずからの課題に置き換えて果たしたことになるのではないだろうか。

⁸ ここでは、キルケゴール自身が、「革命時代」は「両義性」を有しているというように明白に述べているわけではないが、「革命時代」が一方的な評価では捉えきれずに、むしろ両方向で捉えられる意義を合わせ持っているということを明らかにしている点で、キルケ

ゴールの両義的な見方の特徴が指摘できる。なお、キルケゴール自身、「両義性(Tvetydighed)」という用語を随所で使用している。たとえば、人間の本性を表すものとしての「両義性」(KW, XIV, 53-54)、実存(存在)の「両義性」(ibid, 77, 78)、現存しているもの(秩序)の「両義性」(ibid, 80)、情熱のない時代の「両義性」(ibid, 94)といった使用の仕方が『文学評論』では見出される。このような点からも、キルケゴールの両義的に事物を捉える思考方法の特徴を確認することができる。

⁹ キルケゴールにおいてこの「普遍性」の問題がどのように位置づけられているのか、また他の「著作」においてこの問題がどのように論じられているのか、あるいは論じられることになるのかは重要な問題であると思われるが、本研究ノートではさしあたり、キルケゴールの思想を見ていく際の今後のポイントとしての確認にとどめることにする。

¹⁰ 原語は Misundelse であり、「ねたみ」とも訳される。プリンストン版では envy、ヒルシュ版では Neid という訳語が当てられている。キルケゴールはこの言葉について、「倫理的な意味における咎め」(KW, XIV, 81) として理解してはならないと述べており、「反省の理念が、もしそう言ってよいなら、羨望なのである...」(ibid.) とさえ述べ、「羨望」をある種の「理念」と捉えて、その一義的・否定的ニュアンスを打ち消している。

¹¹ キルケゴールが「宗教性」に関する議論を行なうのは、『文学評論』においては第三章が際立っている。第三章は小説の書評という枠組みを超えた議論がなされる章であるが、この章から、特に、キルケゴール自身が「小説に仕えることとは無関係に」(KW, XIV, 76) と断って独自の議論を展開する段落から、「宗教性」に関する議論が顕著に現われる。これは、議論全体の背後にキルケゴール自身の次のような問いが存在しているからだと考えることができる。すなわち「いかにして個人において、宗教性が取り戻されるか」という問いである。

¹² キルケゴールは、現代を古代と比較して次のように述べている。「...古代と現代との間の決定的な差異は、全体が単独者を支えあるいは教化するという、...具体化ではなく、むしろ全体が、大衆の抽象的な同等性において単独者を突き放し、単独者を完全に教化するための抽象化であるという点に見られるだろう...。古代においては、卓越した人間が、他の者にとってはそうなることが不可能であったというところに望みのなさがあったが、他方で、あらゆる人が、ただ宗教的に自己自身を得ることができるばかりということは鼓舞させるものになるだろう。(KW, XIV, 92)

¹³ 「単独者」という概念は、キルケゴールの思想においてはきわめて重要であるが、初期の「著作」では、ある特定の人を指す言葉として、指示代名詞を伴った「かの単独者」(den Enkelte) として用いられていた。それが次第に一般化されて、実存の決定的なカテゴリーとして洗練されていく。大屋(編)前掲書、108-123 頁参照。『文学評論』では、まだそのような洗練された決定的な意味では「単独者」は用いられていないと思われるが、しかし、「宗教的実存」に至るための「条件」として、「単独者」の生成が考えられていることは確認することができる。また「神の前の宗教的単独者(den religieuse Individualitet)」(KW, XIV, 86)という表現も見出されるが、これが後期の著作、たとえばアンティ・クリマクスの仮名著書である『死に至る病』の序文の中の次のような表現、「神の前にただ一人で立ち、自己自身、単独者、この特定の単独者になること...」(KW, XIV, 5) へと洗練されていくことになるものと思われる。なお、『文学評論』では, enkelt (単独の)の他に、Individualitet (個人性)という用語も用いられており、「単独者」を示す一定の用語は使われていない。それは、次に示すように形容詞や単数形・複数形など、さまざまな用法で使われている。det enkelte Individ, den Enkelte, de Enkelte (プリンストン版では individual, single individual など、ヒルシュ版では das Individuum, der Einzelne, die Einzelnen などの訳語が当てられている。)

¹⁴ 小川圭治『キルケゴール』、講談社、1979 年、17-22 頁参照。